

2023 年度南山大学外部評価委員会
評価報告書

南山大学外部評価委員会

南山大学外部評価委員会 名簿

委員長

保 立 和 夫（豊田工業大学 学長）

委 員

富 田 宏 治（関西学院大学 法学部教授）

川 上 忠 重（法政大学 理工学部教授、大学評価室長）

山 本 幸 一（明治大学 研究推進部 研究知財事務室 副参事）

村 田 陽 子（株式会社三交イン 代表取締役社長）

（任期：2023年4月～2025年3月）

目 次

委員長挨拶 外部評価委員会委員長 保立 和夫	1
1 総評	2
2 評価と提言	
(1) 内部質保証の有効性について	3
(2) 自己点検・評価の客観性・妥当性について	5

委員長挨拶

外部評価委員会委員長 保立 和夫

南山大学は、2020年度に第3期の認証評価を受けられました。この年度は新型コロナウイルス感染症の第1波とともに学事が始まりましたが、その直前に「点検・評価報告書」の最終稿を取り纏められ、また、大学としての感染症対策を検討・実装されていく最中において現地ヒアリング等への対応をなさいました。多忙を極められたことと拝察いたします。そのような状況下で、本認証評価において11ある基準のうち、1つは評価S（卓越した水準にある）を、7つは評価A（概ね適切である）をお受けになっておられます。また、基準7と基準8に関しては、それぞれ1点について「長所」とする評価も受けておられます。これらは、貴学のご活動の素晴らしさが理解されたものと考えました。

一方で、3つの基準に関しましては評価B（軽度な問題があり）とされ、関連して3点の「改善課題」が指摘されています。それらに対しましては、今回の外部評価委員会の開催までに、既に改善に向けての多角的な検討が進められていて、第4期認証評価に向けた内部質保証システムの改善が進んでいます。

今回の外部評価委員会では、上記の改善活動の計画ならびに実行の様子をご説明頂きました。その検討の中心は、3点の「改善課題」に関するものと理解しております。3課題は、それぞれ、①「教育課程の編成・実施方針への教育課程の実施に関する基本的な考え方の明示（基準4）」、②「学位授与方針によって求められている学習成果の適切かつ多角的な把握・評価（基準4）」、そして③「大学院の定員管理（基準5）」、であります。

このうち、①と②は密接に関連するものですので、互いに連携させつつ改善を図る必要があると思います。さらに、PDCAサイクルは、授業レベル、教育プログラムレベル、大学レベルの3つのレベル間で関連して回されるものです。したがって、貴学のような総合大学では、学部間の教育ミッションを束ねるように大学レベルでの学位授与方針（ディプロマポリシー：DP）の設定が必要となるかと存じます。つまり、今回の改善の検討にはレベルを越えた厚みのある検討が必要になると考えられ、実際、貴学では大学レベルでのDPの再検討からご議論を始めておられると理解いたしました。

しかし、この点に関しましては、外部評価委員の方々から、「既に学内で実施されている各ご活動を上手に生かされて、これらを活用しつつ改善を進めるのが宜しいのでは」といったご意見が、複数、寄せられています。当職もそのように思いました。今後の改善活動にあたっては、是非、貴学の優れた蓄積を、十分に、上手に、生かされつつ進めて頂けるよう、お願い申し上げます。

1 総評

貴学では極めて丁寧に「自己点検・評価」に取り組む、「内部質保証」を機能させるとともに、認証評価を活用して、内部質保証のシステムそのものの改善にも取り組まれておられます。今回の外部評価においては、その成果が具体的に得られつつある段階であることが確認できました。

大学全体の特色を活かしつつ、トップマネジメントにおいては、内部質保証を「教学マネジメント」と再定義し、その構想を実現するための全学的な会議、ワーキンググループにて協議を重ねておられます。これに呼応しながら、ボトムアップからは、学部等の自己点検・評価において「ピア・レビュー」を有効に活用されています。このような大学執行部と関連教職員が協力しながら、組織的に内部質保証を機能させようとする試みは、内部質保証を具現化した大学の姿として、高く評価できます。

また、数多くの学生に対するサポートに特徴がありました。この特徴は、教員の同僚性に基づくピア・レビューの精神の延長線上にあると考えられ、単なる支援のみならず、学生参画の取り組みにより推進されておられます。教職員、学生が一体となって学園の運営に取り組んでいるからこそ、学修者視点から教育環境の整備が進んでいるものと思われます。今後は、自己点検・評価においても組織的な「学生参画」についての実践が待たれるところです。

前回の認証評価結果の改善課題に対しても、大学として真摯に取り組んでおられます。特に「学習成果」に対する対応は、抜本的な見直しも含めて、進行段階ではあるものの、この認証評価結果に対する全学的な観点からの対応は、他大学の範となる取り組みとして評価できます。

ただし、大学全体として、認証評価結果からの改善を急ぐあまりに、その成果の実効性の確保について、自己点検・評価活動の効果・効率、負荷軽減の実現については、今後の課題として残るものもあって思われました。改革・改善のスタート期にあっては、試行錯誤が続くところですが、改善の見通しがついた段階においては、評価の効果・効率についても議論を行う必要があります。

自己点検・評価から読み取れる貴学の特色は、障害のある学生への支援と優れた学習・教育環境の整備でした。このことは貴学の建学の精神である「人間の尊厳のために」を体現されているものと感じました。学習・教育環境の整備はまさに学生が求めていることであり、貴学の学修者視点の姿勢が現れたものです。建学の精神の具現化した姿を示すことも、自己点検・評価の重要な役割の一つであり、貴学固有の文脈における評価が行われていることを確認することができました。

大学として、まずは学術研究の追究、専門性の涵養があり、一方で社会に求め

られる人材の育成という側面もあるなかでの取り組みとなりますが、貴学が社会に果たす役割に、大きな期待を寄せております。

2 評価と提言

(1) 内部質保証の有効性について

① 客観的指標や基準をもとに、データ (Institutional Research) を活用して内部質保証の有効性を確認すること

内部質保証の有効性に対する具体的な評価は、今後の IR を含めた分析が必要です。計画立案から、教育研究の実践、その分析・評価、改善に至るストーリーを点検・評価いただく必要があると思われまます。

しかしながら、今回の外部評価の段階においては第3期認証評価での改善課題に対する対応は、大学院の定員管理を除いて、その進捗を確認することができました。とりわけ、教学マネジメント体制の構築には、3つのポリシーの連関や学習成果の把握・可視化・評価に取り組んでおられることが確認でき、認証評価結果を起点として、内部質保証を有効に機能させていることが窺えます。

学習成果の把握・評価については、アンケート調査による「間接指標による評価」や、LMS における学習ポートフォリオを活用した「直接指標による評価」等が提案されています。これら学習ポートフォリオの活用や、DP を中心とした内部質保証を機能させるための評価指標や判断基準 (評価の視点) の設定については、貴学内でも温度差があるように見受けられました。学生生活4年間の学修成果の把握には、苦心されるようですが、社会では成績表だけで評価するのではなく、課題や学習に対する姿勢や、経験から得たもの等、学習の過程も重視されることがあります。定性的指標、定量的指標など、様々な角度からの評価も検討いただく必要があります。

貴学で進めておられる教学マネジメントの組織体制を有効に活用し、学修者の目線で、大学としての議論のさらなる進捗を期待いたします。

② 全学内部質保証推進組織を起点とした教育の企画・設計、検証、改善に至るサイクルが構築されていること

認証評価の結果 (2021年3月) では、内部質保証システムについては、「内部質保証委員会」を軸に適切な体制が整備されており、3つのポリシーを起点とした PDCA サイクルが有効に機能しているとの高い評価を得られています (別紙1、p4-5)。この評価の証左として、認証評価実施年度 (2020年度) から、PDCA サイクルの企画・設計に注目して「目標・計画を明確に示すことができる仕組み」を試行しており (資料6、p2)、認証評価後においても、「2019年度南山大学外

部評価委員会評価報告書を受理して」(2021年9月)(資料3)のとおり、貴学として評価結果を分析した上で、改善課題を重点化し、継続的に質保証に取り組んでおられることが分かります。

具体的には、認証評価を目的とした長中期的な改善計画の工程表の作成(資料4)や内部質保証推進委員会ワーキンググループによるディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの改正、また学習成果の測定・把握・可視化に向けた検討が挙げられ(資料5)、2023年度からは、さらに新たな取り組みへと改善が進められています(資料10)。

認証評価結果や外部評価結果を、内部質保証システムのなかで検討、検証し、改善活動へ結実させていることは、内部質保証委員会、同推進委員会を中心とする質保証体制が機能していることの証左です。とりわけ、全学的な内部質保証推進組織が、多彩な専門分野を有する学部、学科等との丁寧な議論を積み重ね、全学的に質保証を推進していることは、他大学の範となる優れた取組みとして評価に値します。

③ DP と授業レベルとを繋ぐ観点から、CP における教育課程の実施に関する基本的な考え方を明示し、学修成果の把握・評価に努めること

学位授与方針(DP)によって求められている学習成果の適切かつ多角的な把握・評価が課題とされています。学習成果の把握・評価は、具体的には、教育プログラムにおいて、さらに実質的には、まず授業レベルにおいて実施されるものです。つまり、DPで求められている学習成果は、教育課程の編成・実施方針(CP)を経由して構成される授業レベルで、把握・評価されるものと思われます。

今回の認証評価においては、一部の研究科において「CPに関して教育課程の実施に関する基本的な考え方の明示」が必要との指摘がありますが、つまり「DPと授業レベルとを繋ぐCPへの教育課程の実施に関する基本的な考え方の明示が不十分」と言われていると理解しました。

つまり、二つの課題は互いに関連していて、同時に解決することができると思われます。実際に、今回の外部評価委員会では、「各授業のシラバスにDPで求められている学習成果のどれを狙った授業なのかを明示してはどうか」、あるいは「各授業の終了時アンケートの項目にDPで求められている学習成果の達成状況を学生に聞いてみてはどうか」との意見が、複数の委員から提示されました。これらは、学習成果を適切に把握・評価していく対応策の一部になりましょう。また、「CPに教育課程の実施に関する基本的な考え方を明示」することは、DPと授業レベルの到達目標を連関しやすくするものですので、合わせて検討されることが望まれます。

④ 学習成果の把握・評価の学内での好事例の水平展開をはかること

人文学部以外に対して、学習成果の適切かつ多角的な把握・評価が課題とされています。外部評価委員会では「既に学内で実施されている各ご活動を活用しつつ改善を進めるのが宜しいのでは」との意見がありました。貴学の優れた蓄積を、十分に、上手に、生かされつつ、今後の改善活動を進めて頂けるよう、お願い申し上げます。

(2) 自己点検・評価の客観性・妥当性について

① 学習成果の把握を含めた評価の客観性は十分に担保されていること

学習成果の把握・評価を課題としながらも、その取組みを進めており、また評価結果を改善に活用する体制も構築されています。とりわけ、学内のピア・レビューの導入や活用は、自己点検・評価の客観性、妥当性を確保する貴学固有の特色ある取組みであり、優れた取り組みとして評価に値します。

学部・学科、研究科・専攻毎の学習成果の把握・評価方法については、さらに学内での議論を踏まえて、効果あるものに工夫し、貴学の教育プログラムのアピールポイントを積極的に掘り起こす「場」として、自己点検・評価を活用いただくとよいと思われまます。

② 学習成果の把握・評価を軸として、自己点検・評価の改善を進めること

自己点検・評価活動は、内部質保証つまり PDCA サイクルの「C」の部分でありますので、内部質保証を機能させる営みの一部分と考える必要があります。一方で、次の第4期の認証評価で注視されるポイントの一つとして、「学習成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性を問う評価」が謳われていますので、正に「学習成果の適切かつ多角的な把握・評価」は重要な視点となります。その意味でも、貴学が進めている学習成果の把握・評価に関する対応は、自己点検・評価の重要なポイントであり、貴学固有の教育プログラムの質を保証する仕組みの一つとして定着していかれることが望まれます。

学習成果への取組みに関して、教学マネジメント構想会議等で想定されている「学修成果・教育成果の把握・可視化」では、間接的な指標（GPA／学修ポートフォリオ／学位取得状況／学生の成長実感／進学率や就職率／留年率・中途退学率／学修時間／アセスメントテスト／資格取得や受賞・表彰歴等の状況／卒業生からの評価など）が多い印象を受けました。

間接的な指標は、複数の評価が混在している場合が多く（例えば、GPA は複数の科目成績（GP）が混在した値となります）、評価の混在は、改善に向けた判断材料には成りにくいという性格を有しています。間接的な指標は、プログラム

の現状把握や異常値の発見には有用であるものの、改善点を見出すには不十分です。

直接的な指標とは、授業科目におけるテストや課題に近いものです。シラバス等で提示した到達目標を理解しているか、確認できる指標の開発が望まれます。いくつかの学部・学科では、卒業研究・ゼミナール科目において、ルーブリック等を活用し、DPに応じた評価基準を設けつつありますので、他の授業科目におきましても直接的な指標による到達目標の評価を展開されることを期待します。

③ 教育の質保証の起点はシラバスであり、学修成果の把握・評価の前提として、「小テスト」等による直接指標による学習到達度の確認に努めること

課題に上げられていた学習成果の設定、測定、評価、改善にかかる観点は、質保証システムのうち、評価を行うための基盤であり、DPを軸とした学習のストーリーが成立しているか、すなわちPDCAサイクルが描けているかが重要な要素となります。

自己点検・評価報告書では、外部のアセスメントテストや学生調査の実施が計画されておりますが、教育の質保証の起点は、シラバスの到達目標にあります。個々の授業科目の到達目標に対して、学生がどのような水準に達しているのかを確認すること（テストの得点やレポート課題の水準等）が、自己点検・評価の最小単位です。授業レベルの質保証とは、「シラバスにおける到達目標」と「テストやレポート等（成績評価）」をセットとして考えるとよいでしょう。何をもちいて当該科目を合格とするのか、どこまでできればA評価、B評価になるのかを明示し、その結果を確認（Check）することによって、次期に向けた授業改善のポイントが明らかになります。授業ごとのアセスメントを踏まえることで、授業科目群、コース、学位プログラム等、より上位のレイヤーにおける到達目標、学習成果の評価が可能となり、提供科目の内容や学習順序、授業方法等の見直しを促す情報を得られるようになるでしょう。こうした改善を促す情報を得るために、履修成績データ等の分析を行うIRが情報提供者としての役割を発揮されることが期待されます。

外部テストや学生調査は間接的にアセスメントにかかる情報を提供しますが、DPに定める学習成果の到達は、貴学固有の教育の中にあります。シラバスと成績評価に着目して、学生の成長を確認されることにも配慮されることで、より実質的な教育改善に繋がることが期待できます。貴学固有の教育活動を明らかにするためにも、他者の物差しだけでなく、自らの物差しも見出し、自己点検・評価に取り組むことも考慮されるとよいでしょう。

④ 学生の意見を取り入れた評価を、これまでの実績をもとに工夫すること

今後の自己点検・評価の在り方として、「学生の意見を取り入れた評価」が挙げられています。貴学は、今回の認証評価において、基準7「学生支援」において評価Sを受けておられますが、これは貴学の建学の理念「人間の尊厳を尊重かつ推進する人材の育成」に裏打ちされているものと思われまます。このような貴学の校風は、「学生の意見を取り入れる」こととも整合性があるものと拝察いたします。貴学が「建学の理念」を具現化してゆく活動において、すでに数多くの学生参画の取組みを進めておられることを背景として、これら諸活動を学生の意見を取り入れた評価の仕組みとして昇華し、学生からも高く評価される大学であり続けることを期待しております。

⑤ 大学院の充実にあたり、専門を深めることの意味と価値を的確に社会に発信すること

大学院の定員充足率が課題となっております。この課題は貴学のみならず、私立大学全般の課題であり、これを改善するには、各大学が教育課程に工夫を施すことや、社会人のリスクリングに対応することはもちろんのこと、加えて、「専門を深めることの意味と価値」を社会に的確に発信することも、また、必要であると思います。

今回の外部評価委員会において、学術研究や専門性の涵養を目指す大学教育が、社会で必要な力とどのように接続されていくのかとの議論がありました。企業では成績等を期待しない等の声もありました。

そのような中で、貴学では、学術的な学問を修得していくプロセスにこそ、社会で必要となる汎用的能力が涵養される教育を行ってきたとの自負をお持ちでいらっしゃり、そのことは、大学のあり方として大変に重要であると考えます。

私どもは、専門を学修するときに「覚える」のではなく「理解する」ことが重要であると、学生に訴えています。専門領域の知識は「体系的に理解」してはじめて活用できる「専門力」になるからです。理解するために、苦労して、深く考えるプロセスにおいて、「論理的思考力」を体得します。卒論や修論に挑むプロセスでは、研究する苦労を経験する中で、「論理的記述力」「プレゼンテーション力」、「忍耐力」、「協調性」等々が涵養されます。この意味で、「研究」にこそ「学修」の基盤があり、大学の人材育成機能を駆動するものと考えられます。つまり、博士前期課程や博士後期課程に進学することは、単に「専門力」、「研究力」という言葉で語るのではなく、その具体的な内容としては、種々の「汎用的能力」つまりは、社会に必要な「人間力」も深めていると考えます。研究によって鍛えられる汎用的能力は、部活動、アルバイト、ボランティア等々の諸活動で得られる「人間力」とは、また異なる、大学教育独自の機能を背景としたものです。

こうした理解を、貴学内でもより一層共有するとともに、社会に理解して頂け

るように、アカデミアとして発信することが、博士前期課程・後期課程を磨き続ける努力とともに、必要であると思われます。